

An Essay on the Labor History of Russian Immigrants in the USA (3)

山内, 昭人
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門

<https://doi.org/10.15017/26236>

出版情報 : 史淵. 150, pp.129-172, 2013-03-14. Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



九州大学大学院人文科学研究院
『史淵』第150輯 抜刷
2013年3月発行

在米ロシア人移民労働運動史研究ノート(3)

山内昭人

在米ロシア人移民労働運動史研究ノート（3）

山内 昭人

まえがき

- 1 在米ロシア人移民史概観
 - 2 在米ロシア人移民労働者の世界
 - 3 ロシア語新聞報道にみる在米ロシア人の意識
 - 4 逮捕・国外追放者にみる在米ロシア人労働者像（以上、第148輯）
- 補章 ロシア人労働者同盟
- 5 在米ロシア人コロニー統一の試み（以上、第149輯）
- 補章2 在米ロシア人諸組織連盟と第2回ロシア人コロニー全市民大会
- 6 在米ソヴェト・ロシア政府代表と在米ロシア人レフトウィング
 - 7 在米ソヴェト・ロシア政府代表と在米ロシア人労働者（以上、本輯）

補章2 在米ロシア人諸組織連盟と第2回ロシア人コロニー全市民大会

第5章で取り扱ったロシア人コロニー全市民大会へ向かう動き、およびそこから生まれた組織のその後について、第2篇脱稿後にニューヨークで三つの文書館（室）を中心に調査した結果、新たな知見を得たので再度、補章を設け補足説明を行うことにする⁽¹⁾。

1917年9月29日～10月1日にニューヨークで開催されたロシア（総）領事およびロシア人コロニー代表協議会（第2篇45-46頁）について同10月中に刊行された報告書『ロシア（総）領事およびロシア人コロニー代表協議会』を入手したので、最初にそれを紹介する。ただし、3名の編者、つまりドゥイモフ（О. ДЫМОВ）、オメリチェンコ、ブランク（П. Бланк）は、それぞれロシアの友協会議長で個人としての招待者、大使館からの4番目の代表、ロシア民主主義の友協会員で在米ロシア人コロニー（シカゴ）からの代表であり、大使館サイ

ドに片寄った人選であった。その上、わずか15頁しかない小冊子で、信頼できる議事録とまではいかないことは注意を要する⁽²⁾。

出席者は、以下の通りである。

1. 大使館から4名（バフメチェフ、オメリチェンコら）
2. (総)領事館から8名
3. (総)領事館附属の為替取引（業務）から7名
4. ロシア調達委員会から19名（ただし投票権の総数は6名に限定）
5. ギリシア正教宣教師団から1名
6. ロシア人社会団体から4名
7. 在米ロシア人コロニー代表

1) ニューヨークから11名（7～9番目はヴァインシチェイン、シュナベル、スハレフスキーであるが、彼らはいずれも政治亡命者の送り出しに関するニューヨーク会議〔Нью-йоркская Конференция по отправке политических эмигрантов; 既述のニューヨーク市ロシア人革命的諸組織と重なるものとみられる〕からの派遣代表となっている）

2) フィラデルフィアから6名（当地の大衆集会での選出者あり；以下の他の都市でもあり）／3) ピッツバーグから1名／4) シカゴから2名／5) デトロイトから3名／6) ボルチモアから1名／7) ボストンから3名／8) クリーヴランドから1名／9) サンフランシスコから1名

8. 招待された個人3名（サック〔A.J. Sack; ロシア情報局（Russian Information Bureau）〕、ドゥイモフ、インゲルマン博士〔Д-р А. Ингерман; ロシア社会民主主義者ニューヨーク・グループ〕）⁽³⁾

協議会の目的は、「時局の焦眉のニーズに関するロシア人コロニーの要求の調査」および「在米ロシア人移民の利益を守るために着手しなければならない手段の明確化」であり、以下が協議会のプログラムであった⁽⁴⁾。

- 1) ロシア人コロニーの組織化に関する対策
- 2) ロシアへの〔為替による〕送金について
- 3) パスポート規則に関してロシア市民への帰国〔手続等〕の簡易化について

- 4) 兵役義務について
- 5) 副領事および領事館員について
- 6) ロシア人コロニー全アメリカ（общеамериканского）民主主義大会の招集について
- 7) 法律的支援の組織化について
- 8) 医療支援の組織化について

1917年9月29日午後2時半、特命〔全権〕大使バフメチェフによる開会演説で初日の協議が始まった。バフメチェフによる演説内容は、こうである。

本集会は、コロニーのために社会団体とロシア正式代表との共同作業という焦眉の要求を念頭に招集された全く協議的なものである。ロシア市民のアメリカ軍への召集に関する物騒なコロニーの問題について、現在〔アメリカ〕連邦政府との交渉が行われている。

続いて、ロシア人コロニーの組織化への構成、ニーズ、程度について報告し、その目標は合州国に居住するロシア市民大衆の文化的および経済的レベルでの向上であり、その実現へ向かう作業のため、とりわけ以下を方針とする予定である。

- 1) 基礎的な啓蒙（ロシア語の読み書き能力など）
- 2) 英語と合州国の学習
- 3) 地域の法律を知らないこととの闘い、ロシア市民への法律的支援など
- 4) ロシア人住民へしかるべき医療支援をすることなど
- 5) 種々の日常生活支援（相互支援、労働書記局、職業安定所など）
- 6) 領事館、大使館および中央政府に対してロシア人コロニーの全般的利益を代表することなど

統一の形態に関して、報告者の意見によれば、統一の二つのタイプ、つまり既述〔第2篇52頁〕の組織単位加盟と個人単位加盟がありうる、と。

このバフメチェフによる報告は、活発な意見交換を引き起こし、協議の結果、以下を支援する必要性が明らかとなった。すなわち、ロシア人コロニーの自発的組織を基礎として、①文化-啓蒙の支援、②医療支援、③法律的支援。

初日の閉会を前に、資格審査委員会委員としてヴァインシチェイン、オメリチェンコら8名が選出され、協議会参加への代表委任状の審査が委任された⁽⁵⁾。

9月30日の二日目協議の冒頭、ロシア国立貯金局監査官によってロシアへの送金に関する領事の活動について報告がなされた。最近12カ月で取扱業務は300万ドル以上にも達したとのことであり、多くの発言者が送金への改善（休日および夜間の開設など）を要望した。続いて、資格審査委員会の報告があり、在米コロニー代表29名のうち3名が認定されなかった⁽⁶⁾。

大いに活発な意見交換がなされたのは、パスポートとロシアへの旅の困難についてであり、大使館代表、つまりバフメチェフは、困難はもっぱらロシアの全般的状況によって引き起こされているという現況説明にとどまった（第2篇43頁参照）⁽⁷⁾。

10月1日の三日目協議の冒頭、兵役義務についての問題が審議され、特別な注意が地域の兵役免除活動に払われた。大使館代表の応答は、問題が生じた場合、上級審に事件を控訴し、あわてずにその結果を待つべきであるという程度のものであった。それゆえ大使館の干渉は、事件が上級審で負けた後にのみ意味をなすことになるのだが、果たして大使館が「干渉」を実行するかは、前篇（49-50頁）で論じたように、はなはだ疑問である。ともかく、協議会で推奨されたのは、将来のありうる誤解を避けるために全ロシア市民が前もって自らの身分証明書を携行することであった。

ロシア軍へのアメリカ人およびアメリカ軍へのロシア人の相互召集に関する合州国との協定の可能性について、コロニー代表は、ロシア市民にはロシア軍への兵役義務を果たすために出動する可能性が提供されていると表明し、他の側からは、アメリカ軍の隊列に認められたロシア市民からのロシア部隊を形成する希望も示された⁽⁸⁾。けれども、いずれも現実味を帯びる議論とはなりえなかったろう。

続いて、副領事および領事館員についての問題に関して、大多数の発言者によって州におけるロシア領事館のネットワークの拡大が要求された。とくにデトロイト代表チェルノフ（А. Чернов）ら3名は、彼らを選出された大衆集会

で採択された、デトロイトに副領事館設立を求める決議を表明した⁽⁹⁾。

喫緊のロシア人コロニー民主主義的大会の招集に関して、社会団体代表たちは、大使館からの代表も参加するような大会招集組織委員会を本協議会が選出するよう希望を表明した。それに対してバフメチェフは、大会招集に全く同感だが、しかしそのような組織化は全く社会団体のイニシャティヴにまかせられなければならないと主張した。そのため、協議を中断して、関係代表だけで話し合いがもたれ、ロシア人コロニー大会招集組織委員会〔統一組織委員会〕のメンバーとして以下の7名が選出された。ブラギンスキー（Брагинский; フィラデルフィア・コロニー）、ヴァインシチェイン、ムジチェンコ（М.Ф. Музыченко; ニューヨーク・コロニー）、ルビノフ（Д.М. Рубинов; 同上）、サフノフスキー（А.Н. Сахновский; ロシア人社会団体）、チェルノフ、シュナベル⁽¹⁰⁾。

住民の法的支援の組織化の問題について、①あらゆる領事館に法律顧問のポストの創設、②ロシア人移民の最も重要なセンターでの良心的法律家との関係確立などの構想が大使館代表によって発表されたが、時間遅れのため法律および医療支援についての詳細な審議が議事日程から取り下げられた。そして、夕方6時、議長を務めたバフメチェフが参加者へ謝意を表し、閉会を宣した⁽¹¹⁾。

ひと月後にはロシア10月革命が起り、1918年に入って3月半ばにブレスト-リトフスク条約が全ロシア・ソヴェト大会で批准された後、ポリシェヴィキ新政権は条約を拒否するであろうとの希望的観測が裏切られたアメリカ政界および言論界において新政権批判が公然化していた。その時期、『ニューヨーク・タイムズ』1918年5月23日号の記事「当地の20万人のスラヴ人、カイザーと戦う用意あり」によれば、ニューヨークで新たに結成されたロシア人義勇軍組織を代表してセメノフスキー、ローゼンターリ（Е. Розенталь）ら4名の代表団が請願のため首都へ向かった。彼らがウィルソン大統領に求めたのは、直ちに義勇軍をアメリカ西海岸に集め、そこからシベリア経由でロシアの最前線に送る計画案の実施許可であった。ここで問題にしたいのは、以下のローゼンターリの発言である。「我々が企てている計画は、この国とカナダにおけるすべての評判のよい（reputable）ロシア人協会を包含しているアメリカのロシア人諸

組織連盟のよく考えられた判断を代表している。それはこの都市のアーリントン・ホールで先の冬早々開催された5日間の全ロシア人大会の結論である」⁽¹²⁾。開催期間に下駄を履かせていることは論外として、当該大会を主導したセメノフスキーらが、いかに大会を自分たちの立場に引き寄せ利用しようとしていたかの思惑が、ここに垣間見られる。その会見には大統領も陸軍長官ベイカー(N.D. Baker)も応じなかった。

この代表団は、オクンツォフの後年の著作の中の評価によれば、ロシア人全市民大会を代表してのものであったが、その派遣は「ロシア人コロニーを犠牲にしてより大事なことを台無しにする」行動であった⁽¹³⁾。

既述(第2篇51頁)の1918年2月9-11日のロシア人コロニー全市民大会で創設されることになった在米ロシア人諸組織連盟に関して、ニューヨーク公共図書館には1箱(7フォルダー)だけだが当該史料が残されている。ただし、同連盟執行中央委員会関係文書は散発的にしかなく、同連盟の有力なフィラデルフィア地区(支部)委員会関係文書(1918年3月2日の地区(支部)委員会第1回会議からほぼ1週間おきに開催され、4月14日の第7回会議までの手書き議事録⁽¹⁴⁾など)が主である。以下、それらの史料によって連盟の活動状況の一端を明らかにする。

最初に、10条から成る在米ロシア人諸組織連盟の規約(Устав (Конституция) Федерации Русских Организации в Америке)を抜粋しておく。

第3条 連盟の目的

- 1) 無党派の原則での在米ロシア人コロニーの広汎な統一
- 2) 啓蒙活動
- 3) 在米ロシア人市民の保護
- 4) ロシア人とアメリカ人との間の友好関係の発展への協力
- 5) ロシアにおける共和主義-民主主義的体制への全面協力

第4条 1) 連盟はアメリカ全州で自らの地区委員会を開設し、既存の組織を自らのメンバーに受け入れ、そして新組織を創設する権利を持つ。／……

第5条 1) ……/2) 執行中央委員会は15名のメンバーと5名の同候補者の数で諸組織代表者全市民大会によって1年間、つまり来たる大会まで選出される。

3) 執行中央委員会の15名のメンバーは自らの仲間から連盟の職務上の顔、つまり会長、副会長、出納係、書記を選出する。/……⁽¹⁵⁾

ロシア人コロニー全市民大会の最終日（1918年2月11日）に選出された中央執行委員15名のうち10名が出席して、2月18日に第1回会議がニューヨークで開催された。そこで以下の役員が選出され、同4名のうち3名の署名をもって同委員会のすべての小切手は有効とした。すなわち、議長にセムコフスキー、副議長にズヴォリコ（M. Zworyko (Zworiko)）、出納係にヴィトネイ（В. Витней-Вишневецкий; William C. Witney）、そして書記にマルティノヴィチ（Л. Маргънович; L.G. Martinowitz; L. Martin）が⁽¹⁶⁾。

散発的に残されている連盟執行中央委員会文書類のうち、1918年8月13日付文書で連盟はバフメチェフ大使へ、誤ってアメリカ軍へ編入された2名のロシア市民の兵役解除に関して取りなしを頼んでいる⁽¹⁷⁾。果たしてバフメチェフが取りなしたかどうかは詳らかでないが、既述の立場からすれば、その可能性は低いとみられる。

ここで、バフメチェフの政治的立場を（約1年半後の史料だが）再確認しておくことにする。

1919年10月9日のバフメチェフとアメリカ國務長官ランシング（R. Lansing）との会談の中で、ランシングが追加軍隊を派遣することは不可能であろうと強調したのに対して、バフメチェフはシベリアではアメリカ軍の存在に反対するいかなる広汎な公の抗議もみあたらないと反論した。これに対してランシングは、反対はバフメチェフが考えている以上にヨリ広汎に広がっており、合州国が追加兵を送ることは絶対に不可能だ、と述べた⁽¹⁸⁾。ひと半月後（11月24日）にも、（ロシア臨時政府期にモスクワ総領事館の副領事を務め、当時國務省のロシア部門の長に就いていた）プール（D.C. Poole）との会談でバフメチェフは、「アメリカの中立」に関して軍需品を供給する用意を含めることの必要性

を主張した。武器を送ることは、ロシア人同士が殺し合うためにそれが使われるであろうから、アメリカでは不人気だとのプールの懸念に対して、バフメチェフは断乎として反対した⁽¹⁹⁾。いずれの非公式発言でも、バフメチェフの強硬姿勢が顕著であった。

なお、バフメチェフ自身が自らの在米中の活動を、外交面を中心に以下のような6つの時期区分のもとに簡潔に概観した原稿が残っている⁽²⁰⁾。

- 1) ペトログラート出発時から大使職就任まで
- 2) 大使職就任からボリシェヴィキ革命まで
- 3) ボリシェヴィキ革命から世界大戦休戦まで
- 4) 休戦からパリでの講和会議を経て1919年7月ワシントンへの復帰まで
- 5) 1919年7月27日から1921年3月4日、つまりハーディング大統領就任時まで
- 6) [1921年] 3月4日から大使館閉鎖、つまり1922年6月30日まで

その中で「主要問題であったのは、もちろんアメリカ政府との関係であった」と記されているように、バフメチェフの関心が奈辺にあったかは明らかであり、コロンビア大学に寄贈されたバフメチェフ文庫の膨大な文書類の中には、在米ロシア人コロニー、ましてやその統一の試みに関するものは一切残されていない。

話を戻して、1918年10月28日の連盟執行中央委員会は、第2回在米ロシア人コロニー全市民大会を12月13-15日に招集することを決定し、10月30日付で執行中央委員会各メンバーへ通知し⁽²¹⁾、そして活字印刷による在米全ロシア人組織への招請状も配布した。その中で、以下に摘記要約する13条から成る規則に則っての開催であることが記された⁽²²⁾。

1) 大会にはすべてのロシア人組織（ボリシェヴィキ的および君主主義的組織を除いて）が参加できる。

3) 組織からの代表選出

10～15メンバーの各組織から1代表

15～50メンバーの各組織から2代表

50～100メンバーの各組織から3代表

100メンバー以上の場合には50名毎に1代表プラスだが、1組織から5代表を越えてはいけない。

5）各組織は各代表毎に大会経費を賄うため50ドルを大会金庫に納入する。

6）非組織コロニーからの代表選出

75ないし100名の選挙人で1代表

100名以上ならば2代表（これを越えてはいけない）

第1条の除外規定は、非政治的立場というスタート時の原則を逸脱している。組織からの代表選出のうち最初の1代表選出の基礎メンバー数が少なすぎる。また、各代表の参加費用の50ドルは高すぎる（第2篇48頁参照）。このことに関連して、第2回大会開催直前の1918年12月2日に連盟は、バフメチェフ大使宛に3,000ドル規模の資金援助を拒絶しないよう依頼した。翌12月3日にバフメチェフによってその金額を請け負うとの返事がなされた⁽²³⁾。その財源はアメリカ政府からのものでしかありえないであろうことから考えて、ロシア人コロニー全市民大会の自立性が根本から疑われてもしかたがないであろう。

すでに連盟は第2回大会前に政治的立場の旗幟を鮮明にして変質していたのであり、その一端を連盟フィラデルフィア支部の活動の中で明らかにし、その上で第2回大会の考察に入ることにする。

1918年2月24日、フィラデルフィア地区（支部）委員会の選挙のためにロシア人移住者の組織集会在が約600名の出席者をもって開かれた。議長にアリストタルホフ（П.Н. Аристархов）が選ばれ、350名で支部が組織されることになった。直近の問題として支部は、医療支援、法律的支援、共済組合、労働事務所、英語の夜間学校、フィラデルフィア領事館の再組織化等々に着手することになり、翌2月25日から活動を開始した⁽²⁴⁾。

1918年3月1日には連盟支部によって警察署長宛に日曜日毎の三つの集会開催許可が求められた。一つ目は3月3日の集会で、演者はケレンスキー臨時政府期の議員ブブリコフ（А.А. Бубликов）であり、彼はロシアにおける恐ろしい状態を語り、真のロシア人すべてはドイツやボリシェヴィキと闘わなければ

ならないことを訴える予定であると許可申請書に記された。もう一人の演者はニューヨークから駆けつけた連盟議長のセメノフスキーであり、同趣旨の内容を話すであろうとあった⁽²⁵⁾。

当日午後2時に開会された集会には1,000人以上が参加し、満場一致で採択した決議を支部長名で大統領に送ることになった。翌日送付されたその中で、日本軍によるロシア領土上陸およびロシア国内問題への干渉に対して抗議すること、およびロシアをチュートンの隷属から救うあらゆる努力を払うことを請願した⁽²⁶⁾。

同集会は無党派ロシア人集会を標榜していたにもかかわらず、明らかにアメリカ政府の立場に呼応する政治的立場を取っており、その立場は続く集会でも顕著であった。

二つ目は3月10日の集会で、パターソンのロシア正教会の司祭コズボフ(B.K. Козубов)が講演し、在米ロシア人農民が自らの生産力を増し、対独戦争に勝利するために適用される方法について語る予定であり、当日は午後4時半に開演した⁽²⁷⁾。

三つ目は3月17日の集会で、連盟支部長アリスタルホフが講演し、「いかにこの国のロシア人がロシアをして対独戦争に勝利するよう支援したか」が演目であった⁽²⁸⁾。

許可申請書の末尾で、これらの講演は秩序あるやり方で行われ、いかなる暴力もないか、もしくは法に違反しないであろう、と記されたが、英訳の組織名が“Philadelphia Branch of the Russian Loyal Organizations of America”と、いつの間にか保守回帰を臭わせかねない“Loyal”が付されていた⁽²⁹⁾。

1918年4月14日午後4時から地区(支部)委員会による大衆集会が開催され、同委員会が自らの全権を解除して、新委員会の選挙が行われることになった⁽³⁰⁾。上述のように同日の第7回会議議事録までしか残されていないところからみて、実際に役員の総入れ替えがあった模様だが、なぜわずかひと月半しか経たない組織が役員改選を余儀なくされたのか、そのあたりの事情は詳らかでない。

第2回在米ロシア人コロニー全市民大会は、1918年12月13日午後2時に

ニューヨーク市ベートーヴェン・ホールで開会した。本大会の内容については、上記の保存史料にも言及したものは一切なく、またオクンツォフの後年の著作でも言及すらなく、なかなか手がかりを得ることができなかったが、『ルースコエ・スローヴォ』で紹介連載記事を見つけることができた。ただし、入手したコピーに不鮮明の箇所が多く、その上、網羅的な紹介になっていないように見受けられ、同紙による以下の紹介は、暫定的なものにとどまる。

同紙1918年12月13日号では、以下の予定プログラムが掲げられて開会予告がなされた⁽³¹⁾。

1) ①ロシアとの、②合州国との、③連合国との、④講和会議との我々の関係における当面の政治的局面

2) 連盟執行中央委員会活動についての報告

3) ニューヨークでの人民大学およびロシア人民の家に関連して、ロシア人コロニーにおける文化-啓蒙的活動

4) ロシア人コロニーの医療支援およびニューヨークにおけるロシア人病院の設置

5) ロシア人移民局の設置に関して出国移民と入国移民の問題

6) 組織されていないコロニーの組織化

7) 相互支援

8) ロシア人コロニーへの法律的支援および常設の法律事務所の設置

9) 領事機関の民主化

10) 大会の執行機関の財務

11) ロシア人志願部隊について

12) 窮乏しているロシアの住民の経済的支援

13) 「[1語不鮮明]」および前線から帰還しているロシア人兵士への支援

同日午後3時にロシア人諸組織連盟執行中央委員会議長セメノフスキーが開会を宣した。約200名の代議員が登録されたとのことだが、その数は第1回大会の2倍を越えた。開会早々、パリ講和会議のため渡仏したウィルソン大統領への挨拶電報を送ることになり、満場一致でその電文が採択された。そこには、

上述と同様、親連合国、反ボリシェヴィキ政権という政治的立場が鮮明にされていた⁽³²⁾。

二日目（12月14日）の記事の冒頭、「燃え上がる熱情が有益な仕事の妨げとなる時、これは最も悲しむべき、最も成果なき大会の会議であった」との表現があり⁽³³⁾、大会終了後12月18日の『ルースコエ・スローヴォ』第1面の見出しは、こうであった⁽³⁴⁾。「第2回全市民大会、非成立とみなされる／社会主義的、急進主義的、進歩主義的組織からの10名の代議員、大会を去った、その作業能力の無さとそれを支配している反動的な傾向への抗議のしるしとして」。彼らの発言が本文で以下のように抜粋されている。「目下の大会は実りある仕事をする状態にはない」、「大会は仕事をする事ができない」、「大会は成立しておらず、新たな大会を招集することが必要だ」。

最初の発言は、事ある毎にボリシェヴィキと対立してきたロシア社会民主主義者ニューヨーク・グループ（メンシェヴィキ）に属し、大会への招待代議員でもあった⁽³⁵⁾ インゲルマン博士によるものであった。

肝心のその中身については、上述の理由できちんと紹介できないけれども、その後の運動が確認しがたいところからみても、ロシア人コロニーを巻き込んだ「全市民大会」運動はもはや展開しえなくなったのであろう。第2回大会前にすでに上記のように政治的立場を鮮明にしたことによって運動自体が変質してしまっていたと言ってよい。

6 在米ソヴェト・ロシア政府代表と在米ロシア人レフトウィング

ロシア10月革命後のソヴェト・ロシア政権は、いかにして資本主義先進国と対峙していったか。それは同政権にとって「革命」と「生き残り」、あるいは「革命」と「外交」を賭けた喫緊の課題であった。「革命」のために1919年3月、モスクワで共産主義インタナショナル（コミンテルン）が創設された。その一方で「外交」のために1919年早々、ソヴェト・ロシア政府はアメリカ合州国に対してその実質的な第一歩を踏み出した。すなわち、同年1月2日付でロシア・ソヴェト連邦社会主義共和国（РСФСР）人民委員会議外務人民委

員部（チチュエーリン〔Г. Чичерин〕ほか官房書記1名署名）は、現地在住のロシア市民マルテンスを「アメリカ合州国における外務人民委員部代表」に任命した⁽³⁶⁾。その信任状でのマルテンスの名は「メルテンス」と誤記されていたのだが、そのことに関して問題と思われることは、すぐ後で取り上げる。

信任状は1919年3月18日付でマルテンスおよび書記となったヌオルテヴァ（S. Nuorteva）によってアメリカ国務省へ送られた。その際、一緒に両者の署名のある覚書が添えられ、「ロシア政府は合州国との通商が開始される場合、当初の購入代金を賄うため直ちに欧米の銀行に総額2億ドルものゴールドを備える用意がある」ことまでが表明されていた⁽³⁷⁾。

1919年4月11日、在ニューヨーク「外務人民委員部のアメリカ合州国における代表」によって以下の業務に関する「命令第1号」が出された⁽³⁸⁾。

「1 1919年1月2日付の外務人民委員部の通信No. 9kによれば、私はアメリカ合州国のためのこの委員部の代表に任命されている。3月18日に私は私の任務を遂行しはじめた。

2 その日にサンテリ・ヌオルテヴァが私のビューローの書記に任命され、モリス・ヒルキット（M. Hillquit）が法律顧問に任命された。

3 私はこの国におけるソヴェト政府の唯一の代表であるので、ソヴェト・ロシアのためのすべての外交的および商業的仕事を私のビューローに集中することが必要だとわかった。……／……／7……」

これに対して合州国政府は、マルテンスへソヴェト・ロシア政府代表としての承認を一切与えず、またニューヨークにマルテンスが設置したロシア・ソヴェト政府ビューロー（以下、ソヴェト・ビューローと略記）事務所に対して、早くも1919年6月12日に（在野のアメリカニズム唱道者としてニューヨーク州議会のいわゆるラスク委員会の設置に尽力し、それに弁護士補として参加した）スティーヴンソン（A.E. Stevenson）に独断専行して率いられたニューヨーク州保安隊が強制捜査に入り、大量の記録・文書類を押収した⁽³⁹⁾。それは令状なしの不法なものであった⁽⁴⁰⁾。同年11月15日から（12月12日まで）ラスク委員会、そして1920年1月12日から（3月29日まで）アメリカ上院外務委

員会小委員会での両査問を抱えながら、マルテンスは困難な活動を模索している。

本章においては、在米ソヴェト・ロシア政府（非公認）代表マルテンスおよび彼の率いるソヴェト・ビューローの活動全般の概括的把握をめざすのではなく、マルテンスと在米ロシア人レフトウィング、具体的にはアメリカ共産党（CPA）創設時その重要な一翼を担ったロシア社会主義連盟（ロシア人部連盟）との対立を、在米ロシア人移民労働運動のもう一つの分裂の事例として考察する。そして次章において、マルテンスらによる在米ロシア人労働者との関係、とりわけ彼らの産業労働者としてのロシアへの再入国運動に関して考察する。

ロンドン警視庁によるイギリス政府への1919年7月14日付報告には、マルテンスとロシア社会主義連盟との衝突が大西洋を越えて早々と次のように報じられていた⁽⁴¹⁾。ソヴェト・ロシア政府代表としてマルテンスは、同連盟の権威を認めることを拒絶し、連盟から追放された人物たちをビューローの職員に指名した。1919年5月10日に連盟ニューヨーク委員会の会議が開かれ、そこでマルテンスは痛烈に攻撃され、彼による指名の問題を連盟は来たる全体会議で提起するとの決定がなされた、と。

1919年7月2日にマルテンスは、〔ソヴェト・〕ビューローが強制捜査された時から3週間がたったが、しかし我々の状態は今日まで不安定なままでありつづけている、と外務人民委員部へ報告した⁽⁴²⁾。そればかりではなく、ロシア社会主義連盟との対立が次のように報告された。つい数日前我々は知った、ロシア連盟の中央〔執行〕委員会は公然と我々のビューローに反対する行動に出、彼らによって誤解されたポリシェヴィズムの原則への我々のあやまちを列挙した声明を方々に送付しようと決心している。彼らのいかなる論拠や確信も効力をもたない。ビューローの立場に否定的に影響し、連盟やレフトウィングも完全に破壊しうるそのような活動を、あなたがたが断乎として終わらせることが必要だ、と。そして最後に「我々には是非とも金が必要だ」と訴えられた。

当時外務人民委員部参事会メンバーで北欧に駐在していたリトヴィノフ

（М.М. Литвинов）の〔おそらくチチュエーリン宛〕1919年8月付書簡の中に、「金をマルテンスは、我々の指図に従ってスタングから定期的に受け取らなければならない」とあり⁽⁴³⁾、資金の主たるルートは（クリスティニア〔オスロ〕の弁護士であり、ノルウェー社会民主党を代表してコミンテルン創立大会に出席した）スタング（E. Stang）経由であり、その送金は人民委員会議の要員に指名されていたグルゼンベルグ（ボロジン）（М.М. Бородин [М.М. Грузенберг]）の提案によっていた⁽⁴⁴⁾。

マルテンスは引き続き、1919年8月6日付書簡で外務人民委員部へ次のように報告した⁽⁴⁵⁾。外務人民委員部代表としての私の活動開始早々、ソヴェト・ロシア支援のためアメリカにおける技術力を動員するという考えが生まれた。5月10日に私は「在米ロシア・ソヴェト共和国市民へ」の回状（写しを添付⁽⁴⁶⁾）を回し、7月4-6日にニューヨークで組織および専門家の代表から成る技術〔援助〕会議を招集した（後述）。しかし同会議は、6月12日に我々のビューローがニューヨーク州当局の襲撃を受けたため、予定どおりに実現しなかった、と。

ロシア社会主義連盟中央執行委員会は1919年7月31日付で「ロシア共産主義連盟の全支部へ」（写しを添付⁽⁴⁷⁾）を出し、その中で同会議に参加することを「アメリカ的現実の状況下では空疎なおしゃべりの会議となる同類の大会への参加に自らエネルギーを費やすことはできない」と拒否する旨を伝えた。それゆえマルテンスは、再びロシア連盟中央執行委員会との関係に次のように言及せざるをえなかった。我々のビューローに関するあらゆる問題において、同中央執行委員会は犯罪的に愚かに振る舞っている。同メンバーはあらゆる我々の事業を傷つけようと努めている。我々によって招集された技術会議を彼らは、ケレンスキーのモスクワ会議とあだ名をつけ、拒否した、と。

1919年8月8日晚、アメリカ共産党第4ロシア人支部によって特別会議が非公開で開かれた。条件が許しただいすぐに彼の地に行くことによってロシア人ボリシェヴィキを支援したいすべてのロシア人を登録するマルテンスの計画は、ロシア連盟および同連盟を支持する人々から強い反対にあった。この反対は計画自体に向かっているのではなく、彼らはこの計画の執行者となり、

コントロール
監督・監視することを欲し、その仕事を彼らに委譲するようマルテンスに要求した。その要求をマルテンスは黙認することができず、拒んだ。ために連盟はすべての支部に、もしもその登録が連盟を通じてなされないならばそれを拒否することを要請する書簡を発送することになった⁽⁴⁸⁾。

すでに1年近く前の1918年10月初め、ロシア社会主義連盟はニューヨークでの緊急大会を開催し、連盟の政治的特徴を曖昧でなくポリシェヴィキ化するよう最終的に決定していた。そして来たるべき大会では、連盟の組織的構築と中央集権化の過程の仕上げをめざしつつあった⁽⁴⁹⁾。

1919年8月20-28日、アメリカ共産党ロシア人部連盟第5回定期大会がデトロイト市で開催された。ダヴェンポートの編注によれば、以下は8月22日の討議で、冒頭の報告者は中央執行委員会メンバーのグリン（Gurin）と推定される。彼はマルテンスがソヴェト代表に選出された経緯を次のように報告した。

1918年末に一ビューローがロシアとの接触を確立するためにニューヨークで組織された。メンバーはトラハテンベルグ（A.L. Trachtenberg）、ヌオルテヴァ、ロモノソフ（Ю.В. Ломоносов）、ドゥヴレフスキー（Dubrevsky）〔ドゥヴロフスキー（Д.Е. Дубровский）の誤りであろう〕、ヴァインシチェイン、ブランクシチェイン（I. Blankstein）、マルテンスであり、時々ゲールヴィチも招待された。ゲールヴィチも出席したビューローの一会議で、ロシアから到着したばかりの或る同志に、ソヴェト政府が本会議の出席者の一人を地元代表として行動するよう任命することを可能な限りあらゆる手段を講じて認めさせようとした。それに対してこの同志は、ソヴェト・ロシアに賛成して働いているあらゆる組織が自らを地元代表として考えてもよい、とのロシア側の考えを伝えた。にもかかわらず、ヴァインシチェインを地元代表としてソヴェト政府が指名するよう求める決議が作成され、この趣旨の書簡が書かれ、ロシアへ送られた。

しかし、〔ロシア連盟〕中央〔執行〕委員会は、『HM』編集者として自らの地位を個人的な利益のために利用しようとしたヴァインシチェインの、信用を落とすやり方を知り、彼に対して2週間以内にビューローとの関係を切るか、

それとも同紙を去るか、の最後通告を發した。その期限が過ぎた時、ヴァインシチェインは中央委員会の会議にやって来て、マルテンスがソヴェト・ロシアの地元代表に指名された、とのロシアから届けられた通信を我々に知らせたと。

報告者は以下の推測を加えて、報告を終えた。ヴァインシチェインはかつて同紙で〔メンシェヴィキの〕インゲルマン派に荷担したことがあり、他方、マルテンスはロシアに多くの友だちや追隨者を持ち、党内に敵がおらず、党内対立からも離れていた、と。

中央委員会はマルテンスを招待しての特別会議開催を決定し、そして会議の中で彼を最もふさわしい候補者と言明したものの、次に彼の仕事への監督・監視の問題をめぐって意見衝突が始まった。

ロシア連盟にとって不満だったのは、マルテンスのビューローのスタッフにポリシェヴィキとは言えないヌオルテヴァ、合州国へのロシア鉄道使節団長としてロシア臨時政府より任命され留まっていたロモノソフ、グールヴィチの父親で統計学者のイサーク・グールヴィチ（И.А. Гурвич）、さらには著名な社会主義右派のヒルキットらに加わっていたことであり、事前の相談なしにマルテンスが技術〔援助〕会議の招集を決定したことなどであった。ロシア連盟は、「監督・監視と報告〔義務〕は共産主義綱領の根本方針であり、その最良の例がロシア共産党であり、それは直接的に政権のすべての執行機関を監督・監視している」との立場を取った。それに対して、マルテンスの基本方針は「自分はソヴェト・ロシアの代表として連盟にどんな要求でもする権利を持ち、連盟はそれらを執行しなければならない」というものだった。

大会は以下の決議を賛成127、反対8、棄権15で採択した。

「1）ロシアが合州国から遠く、遮断され、定期的な連絡が不可能であること／……／3）地元の革命的共産主義諸組織はそれらの綱領と戦術においてロシア共産主義者（ポリシェヴィキ）と異なっていないこと／4）……／を考慮に入れて／……アメリカ共産党ロシア人部連盟第5回大会は、ロシア労働者－農民政府の地元代表としての同志マルテンスのすべての活動が、ビューローと

その事務員の活動と同様、……地元ボリシェヴィキ（共産主義者）諸組織の完全な監督・監視の下に置かれなければならない、との結論に達する」⁽⁵⁰⁾。

なお、このソヴェト・ロシア政府代表任命をめぐる問題について、上院外務委員会小委員会によって得られた証言によれば、こうである。当初ヴァインシチェインが在米ソヴェト代表になることが提案された。しかし彼の高潔さの問題が浮上して、その嫌疑を晴らすために2週間が彼に与えられたが、マルテンスが任命を受けることになった、と。この証言にもとづき小委員会は、ロシアからの密使がマルテンスにその信任状を手渡したとき任命の最初の通知だったとのマルテンスの主張との間にある食い違いを問題視した⁽⁵¹⁾。

上記ロシア人部連盟第5回定期大会での討議内容をみると、マルテンスの査問での説明は単純すぎよう。また報告者は、マルテンスには「ロシアに多くの友だちや追随者」がいたと推測しているが、それだとなぜ「メルテンス」と誤記したのであろうか。改めて1919年5月25日付でチチェーリンが署名した、マルテンスがロシア市民であることの「関係当事者殿」宛英文証明書においても、依然「メルテンス」とタイプされ訂正される始末だったところからみて⁽⁵²⁾、単純なタイプミスとは考えがたい。現地と本国との密使を介してのやり取りには、未解明な部分があるように思える。

「状況証拠」的には、マルテンスの査問での主張は虚偽の可能性が高い。理由は、上記1918年末に組織されたレビューローの陣容が二つの組織の構成員からの合同であったからである。すなわち一つは、1918年1月末にアメリカ・レフトウィングによって創設されたアメリカ・ボリシェヴィキ情報局(American Bolshevik Bureau of Information)であり、フレイナ(L.C. Fraina)が局長を務め、ロシア社会主義連盟からはグールヴィチが、ロシア・ボリシェヴィキ・ニューヨーク・セクションからはマルテンスがそれぞれ選ばれていた。もう一つは、1918年6月初めに創設されたロシア・ソヴェト承認同盟(Russian Soviet Recognition League)であり、当座の議長を務めたのがトラハテンベルクであり、スオルテヴァ、『HM』のヴァインシチェイン、ロモノソフらが参加していた。前者は、ロシア10月革命後ソヴェト・ロシアの正式代表が未決定の間、サツ

クを長とするアメリカ政府の息のかかったロシア情報局がポリシエヴィキに関する誤報と中傷を広めていることに対抗して、アメリカ、とりわけ労働者大衆へ向けての自前の情報・解説提供センターをめざした。後者は、レフトウィングがイニシアティブを取ったのではないが、在米ロシア人社会主義者を中心に諸会議・集会から自然発生的に広まった「ソヴェト・ロシア承認」運動の母体として創設された⁽⁵³⁾。

両組織メンバーからの合同ということは、当初ヴァインシチェインの、次いでマルテンスの推薦の背景には、ロシア社会主義連盟はもちろんのことレフトウィングに限定されない、在米ロシア人移民ないし亡命者へ呼びかけるより広汎な運動があったことになる。そればかりか、両組織からソヴェト・ビューローへの展開の中に一定の継承性がみられる。すなわち、両組織の目的をキーワードでそれぞれ挙げるとすれば、「情報」と「承認」であろうが、前者は1919年3月3日に創刊されたソヴェト・ビューローの最初の機関誌（*Weekly Bulletin of the Bureau of Information of Soviet Russia*）のタイトルに如実に示されており、後者はとりわけ対ソヴェト・ロシア技術援助協会（後述）の運動へと発展していくのである。

話を元に戻して、ロシア連盟がマルテンスをモスクワから監督・監視することを求める書簡を出したのに対して、外務人民委員チチャーリンはアメリカ社会党ロシア連盟中央執行委員会宛1919年8月28日付書簡で次のように批判した⁽⁵⁴⁾。あなたがたは自らを正しく認識していない。というのは、1) マルテンスの役割は、外務人民委員部代表であり、共産党でも第3インタナショナルでもない。2) あなたがたの組織は、ロシア共産党（ボ）の地方組織と決して同一視されず、ロシア共産党やその中央委員会の監督・監視下にはない。ソヴェト政権の在米正式代表に反対するあなたがたの示威行動は、極端に有害で組織破壊的な役割を演じている、と。

同様の見解は、コミンテルンを代表してメニショイとバールジンがしたため、密使によって合州国へ届けられた書簡によっても示された。すなわち、使節団とマルテンスは、いかなる地域の組織の監督・監視下にもない。〔在米〕諸組

織は、全ロシア・ソヴェト中央執行委員会にのみ責任がある使節団と全く協同して活動することが求められるだけである、と⁽⁵⁵⁾。

確かにチチャーリンが示した区分は明瞭であるけれども、1)の区分には、果たしてソヴェト・ロシア側に方便としての意識は全くなかったであろうか。それは初期ソヴェト外交の任務の二重性に関わる問題であり、以下で取り上げるように、少なくとも当事者の間ではそのような区分への共通理解は得られていなかった。

ロシア連盟の方は、マルテンスの活動の中に政治的脅威を感じ取った。そのことは、アメリカ司法省の有能な特別捜査官スポランスキー (J. Spolansky) の1919年12月1日付報告に窺える⁽⁵⁶⁾。すなわち、同年11月26日にシカゴでCPA全ロシア共産主義支部会議が、ロシア共産主義連盟中央執行委員会により提案され、ソヴェト・ビューローの支配権が連盟に引き継がれるべきことをマルテンスに要求する議案を討議するために開かれた。ストクリツキーと議長は、議案に賛成演説をしたが、第1支部のフェルドマーク (J. Feldmark) は反対演説をし、その中でチチャーリンとマルテンスの各書簡を紹介した (後者の書簡は、連盟のさまざまな支部でとられた行動に抗議し、連盟がソヴェト・ビューローの業務と財政を監督・監視しているとみていた)。ストクリツキーはそれら書簡を連盟執行部へ引き渡すようフェルドマークに求める議案を提出したが、フェルドマークはそれを拒否した。それにより会議は第1支部全体を連盟から追放することになった。

事の是非はともかくとして、報告どおりとすれば、ロシア連盟執行部に硬直化した対応があったとみられる。

1919年12月17日、CPA中央執行委員会書記ルーセンバーク (Ch.E. Ruthenberg) によって同中央執行委員会 (CEC) 各メンバーヘグールヴィチによる第7動議が送られた⁽⁵⁷⁾。それは、CECにヌオルテヴァの司法省密偵との関係の調査を開始すべきであり、この調査の間、CECはマルテンスへ、ヌオルテヴァのソヴェト・ビューローでの活動停止を求めるものであった。

この動議には、おそらくルーセンバークによるものであろう、次のようなコ

メントが付されていた。CECがその問題をさらに調査することは無益だ。我々はそのような調査を行う手段を持っていない。ソヴェト・ビューロー全体が巻きこまれているように思える時、ビューローにヌオルテヴァの活動停止を求めることは、等しく無益だ、と。

ここにも、ロシア人有力党員マルテンスへの反撥があり、しかもそれが党執行部内での溝をさらに深める結果となり、CPA分裂の伏線が読み取られる。

このゲールヴィチとマルテンスに関して、フレイナが後年コーリィの名でFBIによる取調の中で語った内幕話を紹介しておこう。すなわち、両者の間に争いがある、ゲールヴィチは、ロシア共産党がロシア政府を支配しているので、それゆえ合州国の組織された共産主義者はこの国のロシア政府の代表を支配すべきであるとの考えから、マルテンスに自らがロシア連盟の支配を受けることを要求した。が、マルテンスはこれを拒否した。フレイナもまた、アメリカ共産主義者（あるいはレフトウィング）とロシア政府とは全く別物であり、マルテンスの仕事はソヴェト政府代表としてのものであるとの理由で、ゲールヴィチに強く反対した⁽⁵⁸⁾。

1919年9月初めに分裂・併行して創設され⁽⁵⁹⁾、なにかと対立し合っていたCPAとアメリカ共産主義労働党の両党に対して、コミンテルン執行委員会はおそらく1920年1月頃、以下の声明を発した⁽⁶⁰⁾。

両党は合併に向けて直ちに第一歩を踏み出さなければならないが、我々の情報によれば、相違の主要点は綱領の問題ではなく、主として次の2点に限定される戦術と組織の問題である。

1) 共産主義組織の型、性格、そして構造。党は「民族別連盟」の独立した自治グループの寄せ集めを代表すべきではない。統一した党があるべきであり、ロシア人共産主義組織はこれを合併し、その一部になるべきで、国家内の国家であるべきでない。

2) ソヴェト〔非公認〕大使館の活動、つまりソヴェト当局代表と共産主義組織との間の関係。

この党統一問題自体は別書⁽⁶¹⁾で取り扱ったので、ここでは第2点目だけを

さらに紹介すると、ソヴェト大使はソヴェト当局、つまりマルテンスを任命した全ロシア・ソヴェト中央執行委員会にのみ責任をもち、いかなるアメリカの組織へも彼は責任を持ちえない。それゆえにソヴェト大使をCPAの監督・監視ないしその党のロシア・セクションに従属させるという問題もありえない、と筋論が繰り返された。問題は、その筋論だけで果たして済ませられるかどうかであった。

ほぼ同じ頃（1920年1月17日）、CPAのCEC会議ではソヴェト・ビューローに関して二つの動議が提出され、一つはソヴェト・ビューローを監督・監視することへの支持表明であり、もう一つは対等であるべきとの支持表明であった。前者が通り、その議案は起草委員会に委ねられることになり、委員にフレイナ、グールヴィチ、コーエン（M. Cohen）が選出された。フレイナにより提出されたその案は、二、三のマイナーな修正で採択されたというが、本文書には具体的記述がない⁽⁶²⁾。これによって両組織の対立の溝が埋められたとはとうてい思えない。

1920年1月16日に外務人民委員部はマルテンス宛書簡の中で、以前彼に与えた指示を以下のように再確認した⁽⁶³⁾。

あなたはソヴェト共和国の国家利益を守るため、とりわけ干渉に反対する闘争のため、および商業目的のため外務人民委員部を代表する全権を与えられたのだが、しかしプロパガンダ目的のためでも共産党や第3インタナショナルの領域に関わる任務の遂行のためでも決してない、と上述の区分が繰り返される。その上、あなた一人が人民委員部代表であり、あなたによって任命されたビューローや部のスタッフは、人民委員部に対して何らの代表権も持たず、あなたの同僚としてのみみなされなければならない、とまで明言されているが、それは例えばアメリカ社会党有力指導者の一人、ヒルキットが弁護士としてビューローの一員になっていることなどを念頭においてであったろう。

続けて言うには、我々は近い将来アメリカに一つの共産党が創設されることを断乎として期待する。たとえあなたがたの活動が共産主義的ではなく純粋に国家的問題あるいは商業的任務に関係しようとも、それにもかかわらず

何らかのあなたがたの歩みが党共産主義的問題（партийные коммунистические вопросы）に触れうる場合もある。我々はあなたがたと創設される共産党との間に紛争が生じないことが非常に重要であり、本質的だとみなす、と。

そこで「調和的相互関係」が要請されているのだが、ビューローの活動が「党共産主義的問題」に触れうる可能性が、それを語るソヴェト政府当局に確かに認識されていた。アメリカ政府当局もまた、それを警戒し、ビューローを強制捜査したのである。それに先だって司法長官パーマー（A.M. Palmer）の配下が検閲し秘密裡にコピーを取った「第3（共産主義）インタナショナル・アムステルダム・ビューロー執行委員会メンバー」リュトヘルスのマルテンス宛1920年1月16日付書簡が、暴露され、ブルジョワ新聞に公表された。ロシア連盟もまた、別の意味でその可能性を警戒したし、マルテンスを牽制するための論拠として、同書簡を必要な論評を付してCPA機関誌『コミュニスト』1920年6月1日号に（『ニューヨーク・ワールド』同年4月15日朝刊第2版より）転載した⁽⁶⁴⁾。

同書簡でリュトヘルスは次のように記している。あなたを〔在米ソヴェト政府代表に〕指名する時、あなたの技師としての資格は言及されもしなかったし、考えられもしなかった。非妥協的な共産主義原則に関するあなたの明確な考えが、ヴァインシチェインではなくあなたがヨリいっそう望ましいと決定させた。商業に関する限り、始まりとしてはそれは悪い芸当ではないが、しかし私見では、あなたははるかに遠く大いに行ったし、その問題の悪い側面に集中することによって魂を奪われている。アメリカ政府によるあなたの代表権の承認のための努力はもちろん重要ではあるが、この点に関して私は断然ゲールヴィチに味方する。すなわち、承認における主要な力は労働者からの圧力であらねばならない。小ブルジョワ的個人ないしは〔アメリカ〕社会党のような政党、芸術的・政治的平和主義者や中道を守る人々へのあなたの希望は、根拠のないものであるだけでなく、確立した戦術に反する。あなたが共産党への敵意とともに「中央派」の方へ同情を断然ヨリ多く与えていると私は理解している。あらゆる種類の中立外交的立場は、その出現が功利的理由から擁護されたかもしれな

いけれども、不可能か失敗のように見える。あなたの直接的関係はソヴェト政府とであるけれども、関連する問題は疑いなく共産主義インタナショナルに触れるのです。

続いて論評だが、本書簡は長い間マルテンスとアメリカにおける革命的諸組織との間で醸成されてきている紛争における最終的行為である、と断定された。続いて、本書簡でリュトヘルスが支持表明をしたグルヴィチの主張は『ニューヨーク・コミュニスト』1919年4月19日に掲載された彼の論文と同趣旨だとして、それが紹介された⁽⁶⁵⁾。すなわち、もしも純粹に外交-商業的「努力」がマルテンスの活動の中心となるならば、我々はそれを致命的な誤りだと考える。ロシアと資本主義諸国との間の商業的交流の確立は、ロシアの経済生活のための本質的利点にもかかわらず、ロシア側ではある程度までブレスト-リトフスク条約の署名に似ている、つまり単に「時をかせぐ」ための手段とみなされる。マルテンスの注意の中心、ここでの彼の活動を指揮する絶えず変わらぬ「コンパス」は、アメリカ・プロレタリアートの中での革命的社会主義運動の利益、その運動の成功の希望と保障である前衛、つまりアメリカ社会党レフトウィングの利益であるべきだ、と。

論評の結び近くにはこうある。マルテンスは、共産主義諸組織に耳を傾ける代わりに、彼の政治的アドバイザーやガイドとしてヌオルテヴァ、ヒルキット、その他のような（リュトヘルスが記す）「最悪の種類の日和見主義者たち」を選択した、と。

以上のようにソヴェト・ビューローとロシア社会主義連盟とが対立する間、共産党が正式に形成される直前の1919年夏に外国語諸連盟によってロシアへ派遣されていたアンダーソン（J. A-n = J.F. Anderson [K. Beika]）が、1920年春に戻ってきて、帰国報告をした⁽⁶⁶⁾。その主内容は拙著で取り扱ったので⁽⁶⁷⁾、以下だけを紹介しておく。すなわち、彼は共産党と共産主義労働党の統一に関して〔モスクワで〕署名し、後者の代表リード（J. Reed）と合意した。すでに帰国途次ストックホルムでアンダーソンは、この統一についてマルテンスの下のソヴェト・ビューローとともに対処しなければならないならば、何ものをも

するのを拒む、と語った。

訪ソしたアンダーソンをしてもそうであったように、ロシア社会主義連盟の中央集権的監督・監視志向は一貫して強固であった。それに直面したマルテンスが代表するソヴェト・ビューローにとって、たとえソヴェト・ロシア政府からの援護射撃となる支持表明をもってしても、当時ロシア社会主義連盟がその重要部分を占めていたアメリカ・レフトウイングとの共同には困難が伴った（その上、上述のようにコミンテルン・アムステルダム・サブビューローのリュトヘルスからもより左翼の立場からの懸念がマルテンスへ示された）。

1920年12月15日、労働長官ウィルソン（W.B. Wilson）によってマルテンスへの追放令状が発された。それはラスク委員会に引き続いて行われた上記外務委員会小委員会の査問でも改正移民法に掲げる「力または暴力による合州国政府打倒を信じるか、もしくは唱道する外国人」に該当する証拠など一切挙げられず（マルテンスはロシアから離れていたために未だ正式にロシア共産黨員となっておらず、コミンテルン加盟組織のメンバーでもなかった）、国務省ではなく労働省による政治決定であった。にもかかわらずマルテンスは、その決定を受け入れ、裁判に訴えないとのチチャーリンの指示に従うことになった。それに対して裁判による長期化、その間のマルテンスの滞在を危惧した労働長官は、マルテンス自身の費用で離米するとの条件で令状を執行しないことを表明し、実際、帰国の電報がマルテンスの顧問弁護士レヒト（Ch. Recht）を介して届き次第、1921年2月23日に令状は取り消された。それゆえ、令状が取り消されたのだからマルテンスの再入国は可能である、との判断がレヒトによって示された⁽⁶⁸⁾。

1921年1月22日、「ストックホルム」号でマルテンスが離米し⁽⁶⁹⁾、再入国しなかったことにより、幸か不幸か「党共産主義的問題」の露頭は回避されることになった。とは言え、ロシア社会主義（共産主義）連盟の中央集権的監督・監視志向と、第一義的には外交および商業（それに情報提供および技術援助が加わる）というマルテンスがめざしたものが結びつかなかったばかりか対立の溝を深めた事実は重く、在米ロシア人移民労働運動がロシア社会主義連盟の

イニシャティヴの下、結束して展開されることは明らかに困難であったろう。

7 在米ソヴェト・ロシア政府代表と在米ロシア人労働者

オメリチェンコらの『ロシア－アメリカ便覧』は次のように記していた。1918年のロシア－アメリカ貿易関係の顕著な特徴は、「封鎖」という一言で表せるであろう。がしかし、封鎖は一方的であった。つまり、アメリカがロシアへの輸出だけを制限したのであって、アメリカへのロシアの商品の輸入は禁止されなかった。非常に不利な条件にもかかわらず、1918年の合州国へのロシアの商品の輸入は、前年比でわずか20%〔正確には26%〕の減少を示すだけであった⁽⁷⁰⁾。

具体的なデータを挙げると、以下のようになる⁽⁷¹⁾。

	USAの対ロシア貿易額		USA全貿易に占める対ロシア貿易の比率	
	輸 入	輸 出	輸 入	輸 出
1917年	14,514,431ドル	424,510,459ドル	0.5%	6.8%
1918	10,760,007	17,335,518	0.4	0.3
1919	9,663,088	82,436,185	0.2	1.0
1920	12,480,586	28,727,718	0.2	0.3

1917年に比べてその後の3年間は、アメリカからの輸出は81～96%の大幅減少であるが、アメリカへの輸入については14～33%の減少に留まっている。全面禁輸でないところに在米ソヴェト・ロシア政府代表マルテンスの活躍の余地がありえた。

1919年8月7日付外務人民委員部宛書簡の中で、マルテンスは次のように記していた⁽⁷²⁾。「我々はあなたがたが絶えず合州国との関係に対して保持してきた戦術をよくわかっている。なんとなれば結局のところ合州国は、……それとの関係確立になお希望を持つことができるであろう唯一の資本主義国にとどまっていたからである」。「残念ながら、これらの希望は今までのところかなえられなかったし、すぐにはかなえられないであろう」が、その「関係確立」に

マルテンスは苦心していた。そして1920年9月16日のソヴェト・ビューロー声明の中で、マルテンスはチチェーリンからの電報による指示を受けて、ソヴェト政府はたとえ外交的承認が得られなくとも、外国との貿易回復にとって不可欠な事実上の関係（*de facto relations*）を要求している、とまで表明した⁽⁷³⁾。

1921年1月20日、マルテンスは離米するにあたってソヴェト・ビューローの機関誌『ソヴェト・ロシア』編集者宛に次のような書簡を送った。個人的な後援で同誌が刊行され続けることがわかって私はうれしい。同誌は以前よりも今、ヨリ必要とされるだろう。なぜならば、ソヴェト・ビューローの閉鎖でもって、アメリカ人民はもはやソヴェト共和国の正式代表とのいかなる直接的な接触も保てないであろうから、と⁽⁷⁴⁾。

帰国直後の1921年2月24日、マルテンスがモスクワで出した声明の中でも、ミッションの最も重要な任務の一つは、300万人を超える大きなロシア人コロニーと接触することであった、と表明した⁽⁷⁵⁾。その接触に関して具体的言及はないが、ちなみに、1919年3月18日から任務を遂行しはじめたマルテンスは、ひと月後の時点で毎日の業務の始まりである郵便物整理を次のように記していた。それら郵便物の「最大のグループは、我々との商業関係をしきりに確立したいさまざまな会社からの申し出である。もう一つの非常に大きなグループは、ロシアへ戻ることの可能性に関する在米ロシア人市民からの問い合わせを含み、これらの中には少なくとも数百の問い合わせがすでにあった」⁽⁷⁶⁾。

いかに在米ロシア人の帰国への関心が高く、マルテンスへの期待が大きかったかが窺われる。マルテンスの方もまた、在米ロシア人移民との関係を重視していたのである。

マルテンスの在米ロシア人移民との関係について最初に取り上げるのは、1919年11月15日にマルテンスがランシング国務長官へ宛てた抗議の書簡である。すなわち、〔既述のCPA、URWメンバーらへの強制捜査・逮捕が続く中〕多くの在米ロシア市民が連邦および州の役人によって、同様にいかなる権限もなしに行動する暴力的な暴徒によって、不当な迫害と残酷な扱いにさらされている。それに対してソヴェト・ロシア政府は、国内のアメリカ市民に、たとえ

アメリカ市民側にソヴェト・ロシア政府への明白な敵意が全く疑問の余地なく証明される場合でさえ、公民的で配慮した待遇を与えてきている。ここ二、三日の間に多くのロシア市民がニューヨーク市や他所で逮捕されたり、非常に残忍な身体への暴力を被ったりしている。私のビューローは母国に戻りたいロシア市民からの数千もの申請書を受け取っている。にもかかわらずソヴェト共和国市民は、それなしには輸送手段を確保することのできない、その必要書類を受け取ることを実際に不可能にしているアメリカ当局によって、離米を妨げられている。アメリカ政府へ速やかな出発許可を要請する、と⁽⁷⁷⁾。

バフメチェフが取った既述（第2篇49-50頁）の立場となんと対照的であることか。

そのバフメチェフとアメリカ政府の親密な関係も同じく既述したが、実は、その関係は上院外務委員会小委員会でのマルテンスの査問へ不公平なまでに影響を及ぼした。すなわち、マルテンスがその査問に応じたのは、上院によって命じられた小委員会による「ロシアにおいて何らかの利害もしくは分派を代表すると称するこの国におけるすべての人物と機関の徹底した調査」に期待したからであった⁽⁷⁸⁾。しかるに、外務委員会小委員会の議長である上院議員モーゼズ（G.H. Moses）は、マルテンスの査問後即座に小委員会の仕事の終熄を宣言した。マルテンスの離米後、『ソヴェト・ロシア』は1919年3月19日号の論説で次のように批判した。「存在しない政府の外交使節が、存在する事実上の政府の外交使節よりも法的免除をヨリ十分に要求する権利を持つかどうかの問題を、我々は見逃しているだろう」と⁽⁷⁹⁾。

その外務委員会小委員会の中で、マルテンスは以下を証言している。私は帰国しようと考えているロシア人のために一技術学校の開校を企てたが、この計画は決して完成されなかった。また、「ソヴェト・ロシアを援助したいと望む人々の技術〔援助〕会議を招集すること」を提案したが、こちらの方はこの目的のために2万もの人々が登録した、と⁽⁸⁰⁾。

後者の招集に関して、ビューローの活動開始早々、1919年5月10日にマルテンスは上述の回状「在米ロシア・ソヴェト共和国市民へ」（注46）をロシア

語と英語で出した。その中でまず、在米ロシア人市民のソヴェト・ロシアへ技術的援助を広げようとの傾向をいかに活用するかについての質問に関して、個人や組織から出た多くの問い合わせに答えての回状であることが述べられた。続いて、障害を克服し、再建を目下めざしているロシアの社会主義の可能性は、ソヴェトの力が資本主義のすべての技術的・組織的経験を自分自身の目的のために使うことのできる成功の度合によって決定される、と記された。

そして在米ロシア市民の中に自らがアメリカで得た知識と技能によって母国を支援したいとの大いなる願望があることを確信し、以下の問題を審議し、解決するため諸組織および専門家の代表からなる会議を1919年7月4-6日にニューヨークで開催することが通知された。その問題とは、1) ソヴェト・ロシアに自らの技術力を提供する用意のあるロシア人移住者の全体数の解明；……3) いかなる組織がそのような専門家の準備を手がけるか；……5) この仕事を統一するセンターの創設；6) 彼らの準備とロシアへの移動のためにソヴェト政府の援助はいかなる規模で必要か、であった。最後に、全組織・個人に会議へ提出することを必要とみなす報告、意見、提案をソヴェト・ビューローの技術部へ遅くとも6月15日までに送ることが求められた。

5日後〔その遅れに意味があるのかは定かではないが〕の5月15日には、マルテンスはロシア社会主義連盟および在米ロシア人社会主義諸組織連盟〔在米ロシア人諸組織連盟のことであろう〕のすべての中央委員会（ロシア語版では、中央および地区委員会）宛にその回状を同封し、同会議に関心のあるすべての部門に、この問題について非常に重要だとあなたがたが考えるすべての示唆と提案を同様に6月15日までにしてくれるように、と訴えた⁽⁸¹⁾。

上述のように、その会議招集はロシア社会主義連盟の反撥を招き、また同会議は実現しなかったものの、1919年夏ニューヨークで上記センターとして対ソヴェト・ロシア技術援助協会（The Society for Technical Aid to Soviet Russia）が組織された。そして同種の協会がボストン、デトロイト、フィラデルフィア、シカゴ、サンフランシスコなどで、さらにソヴェト・ビューローの指示下でモントリオールでも組織されていった⁽⁸²⁾。連邦および州当局の迫害にもかかわ

らず、1921年半ば時点で加盟者は計2,500人に上り、1921年7月2-4日にニューヨークの協会のイニシャティヴで第1回全国大会が開催され、合州国とカナダの大都市の11組織から32名の代議員が出席した。そこで組織が統合され、中央ビューローのメンバーが選出され、そして8月13日には機関誌（*Vestnik (the Messenger) of the Society for Technical Aid to Soviet Russia of U.S. and Canada*）が創刊された。同年11月には40の支部を持ち、約1万人をかかえることになる⁽⁸³⁾。

ここでは、その活動を直接追求することはせず、その技術援助を実際にめざす米ロシア人移民労働者を考察することにして、一旦ソヴェト・ロシア側による彼らの受け入れへ目を転じることにする。

当時、ロシアへ到着した外国からの労働者は、二つのグループに振り分けられていた。すなわち、1) 大家族持ちか40歳以上の男たちは、中央ロシアか自分たちのふるさとのまちへ送られ、2) 若い働き手や小家族の働き手は、労働人民委員部によって引き受けられてペトログラートの工場や製作所へ送られた⁽⁸⁴⁾。

1920年9-10月以降アメリカからのロシア人再入国の自然発生的な奔流が押し寄せた⁽⁸⁵⁾。しかも、1920年の終わり数カ月と1921年の初め数カ月の間、在米ロシア人移民のヨリ意識の弱い分子が、ソヴェト当局へいかなる許可を求めることも怠って、安易にロシアへの移住を開始した⁽⁸⁶⁾。

それよりも一足早く『ソヴェト・ロシア』1920年7月24日号に、最高国民経済会議（Высший совет народного хозяйства; ВСНХ）議長〔ルイコフ（А.И. Рыков）〕からの無線電報が掲載された。その中で、ソヴェト・ロシアへ来て仕事を探したい外国人労働者は最初に状況を学ぶために特別な代表団を派遣すべきであり、ロシアへ入国移民する労働者はロシア人労働者よりもヨリよい状態を得ることを期待することはできない、と安易な入国へ警告を発していた⁽⁸⁷⁾。

干渉戦争のさなか飢えと戦禍に悩むソヴェト・ロシアにとって、いわゆる「労働者移民」はプロレタリア・インタナショナルリズムのスローガンの一実践的表現であった。労働人民委員部は移民労働者のための特別委員会を創設し、外国人労働者をソヴェト鉱工業に配置もした。しかしながら、実際には工業失業

者は非常に多く、穀物、家畜、基本技術は非常に厳しいので、何も持たずに到着した工業労働者と貧農民の両方の移民は国家にとって負担となっていた⁽⁸⁸⁾。

この間、マルテンスは帰国し、1921年2月18日にモスクワに戻り、同日晩遅くレーニンと会談した。すぐに技師でもあるマルテンスは、ドンバスへ派遣され、その報告をレーニンにした後、BCHX幹部会メンバーおよび同金属産業総管理部長に任命された⁽⁸⁹⁾。

1921年2月末から3月にかけて人民委員会議と勤労防衛会議（Совет труда и обороны; СТО）はレーニン議長の下、移民受入の改善の重要性について審議を重ねた。2月25日、СТОはアメリカからの移民受入事業を一所管官庁の範囲に集中化することは不可避であるとみなし、その受入調整は3月1日に人民委員会議の審議事項となり、内務人民委員部附属で特別委員会が設置され、そこにモスクワとベトログラート両ソヴェトおよび労働人民委員部の各代表が加わることとなった⁽⁹⁰⁾。

このことは1921年3月19日にマルテンスからレヒトへ打電され、『ソヴェト・ロシア』4月2日号に次のように掲載された。「人民委員会議の命令によって、アメリカからの技術援助を利用するため当地に一委員会が形成されたことを、対ソヴェト・ロシア技術援助協会へ知らせよ。私はそれに所属し、すぐに十分な詳細と指示を送るつもりだ。……」⁽⁹¹⁾

早くも1921年4月9日にソヴェト政府は、合州国からロシアへのすべての入国移民を一時中止する命令を発した。4月20日以降ロシア国境はアメリカからのすべての入国移民に対して閉ざされるであろうことが、『ソヴェト・ロシア』4月23日号で報じられた⁽⁹²⁾。

その一方で、上記特別委員会は1921年3月28日、労働人民委員部によって準備された「アメリカからの労働者の再入国移民の調整の基本的立場」に依拠して、外国から到着した労働者を多くの企業のあちこちへ分散させることは許しがたく、「生産的な圧縮されたかたまり」として労働集約を図ることを決め⁽⁹³⁾、その実現へ向けての検討も始められた。

『ソヴェト・ロシア』1921年8月号には、「ロシアへの労働者の帰国」に関す

るマルテンスから送られてきた以下の書簡が掲載された⁽⁹⁴⁾。すなわち、入国移民の受け入れのために便宜が図られるまで、またソヴェト政府の公式ミッションがその源において出国移民を指揮するためにアメリカで設立されるまで、アメリカからの出国移民の停止が強いられているけれども、アメリカからのロシア人労働者の帰国が我々の産業を築き上げる任務において極めて重要な要素であることは、当地の誰もが理解している。

これらの問題と同様、移民の規制は労働人民委員部の特別委員会の担当にされており、同委員会はBCHX、労働人民委員部、および労働組合の代表から成っている。ロシア行を望む個人的な労働者ないし組織は、入露許可のためにモスクワの労働人民委員部の再入国移民に関する委員会に予め直接問い合わせをすることが助言される。

現状下では、到着後従事する計画である各種の仕事のために求められる完全な装備を多かれ少なかれ整えて来ることのできる組織された集団だけが、ここではうまく働くことができる。経済状態がよりよく変わるまで、ここに道具なしに来る労働者ないし労働者集団は、多くの場合共和国にとって負担となるだけであることが、心に留めおかねなければならない、と。

続いて『ソヴェト・ロシア』1921年10月号には、『エコノミーチェスカヤ・ジーズニ』1921年7月20日号に掲載されたマルテンスの報告文が題名を変えて転訳載された（注86）。改めてここでも、ロシアの社会生活の再建のために外国人を活用する可能性が積極的に指摘された。本報告は、原掲載誌の注によれば、BCHX金属産業総管理部長マルテンスによってCTOへなされたのであり、CTOは1921年6月22日の会議で以下の議案を採択した、とある。

しかし、掲載され第5項目から成る文書は、採択以前のものようであり、以下引用するのは、CTO議長レーニン署名の正式の決議「アメリカ [からの] 産業移民について」からの抄訳である⁽⁹⁵⁾。

「1. 個々の企業または企業群を、アメリカの労働者集団および工業的に発展した農民へ、彼らにある程度の経済的自治を保障するところの契約条件により引き渡す方法で発展させることを望ましいと認める。

2. 労働者の産業移民を、国の生産力向上のため彼らを利用する目的で、BCHXの側からの指示および規定された形での承認に従うところの権利と条件の下で、この労働者の組織された集団をロシアへ勧誘し、彼らに製作所や工場を引き渡す方法で、外国から調整することは不可欠と認める。……上述の調整の組織形態および詳細な条件をBCHXが全ロシア労働組合中央評議会および労働人民委員部との合意により詰めるよう委任する。

3. BCHXにアメリカの対ソヴェト・ロシア技術援助協会と連絡を取り、直ちに……そのような生産集団の組織化に着手することを委任する。この仕事への監督のため、ソヴェト政権がアメリカに自らの代表を持つことが望ましい。

4. 総数12～15名の同志リュトヘルスと彼の協力者たちに……企業および原料供給源の適地を解明するため直ちにウラルとクズネツク炭田へ出発する機会を与える。

5. 調査旅行に関する出費へあとから支出明細書を出す条件で200万ルーブリを同志リュトヘルスへ直ちに支給することをBCHX幹部会に委任する。

6. 第2条で言及された委員会の報告は、1週間後に指定する。委員会の招集は、同志マルテンスに委任する。言及された委員会の任務に、ロシアでの労働者移民全体の条件と当該の施策との調整もまた入る」。

第6条の報告に関してマルテンスは、すでに1921年6月10日に自らが属するBCHX幹部会へ送り、その写しをレーニンのためにCTOにも送っていた。その外国人労働者移民に関する詳細な報告の中でマルテンスは、「外国人、主として外国に居住しているロシア人労働者」の起用の拡大を考え、主としてアメリカのロシア人移民をソヴェト鉱工業に参加させる必要があると問題提起していた⁽⁹⁶⁾。マルテンスを長とするその特別委員会の提案に従って、6月29日にCTOはBCHXの中央産業部に附属して産業移民サブセクションをマルテンスを議長として組織することを決議した⁽⁹⁷⁾。かくして6月22日の決議によって、労働者移民の新しい段階が確定されたのであり、同決議はソヴェト・ロシアの産業および農業経済における外国人労働者の労働のすべてのさらなる組織化のために根本的な意義を持つことになった⁽⁹⁸⁾。

実は、その時構想されていたのが「ある程度の経済的自治」が保障された産業労働者コロニーであり、そのことが初めて第1条に規定された⁽⁹⁹⁾。その構想を具体的に進めるために第4、5条があり、それは自治産業コロニー・クズバス（Автономная индустриальная колония Кузбасс）として実現していく。ここでは、その発端についてだけ触れることにする。

産業労働者コロニー創設のアイデアは、リウトヘルス、キャルヴァート（H.S. Calvert）、ヘイウッド（W.D. Haywood）の3人の意見交換の中から生まれ⁽¹⁰⁰⁾、それにマルテンスが一部関与した。すなわち、リウトヘルスは1919年末～1920年半ばのコミンテルン・アムステルダム・サブビューローの創設から解散までの活動後、1920-21年の冬を南欧イタリアで療養に努め、「1921年春〔4月〕、社会主義建設への自らの仕事を継続するためにモスクワへ戻って来た」⁽¹⁰¹⁾。「継続」と意識されたのは、彼には1919年1-2月のラトヴィヤ共和国建設への参加があったからである⁽¹⁰²⁾。1921年6月1日、リウトヘルスは独自に「産業労働者コロニー」案を公にした⁽¹⁰³⁾。キャルヴァートは、IWWのメンバーで、デトロイト近郊のフォード自動車工場閉鎖による失職後、1921年3月にプロフィンテルン創立大会出席のためモスクワにやって来た⁽¹⁰⁴⁾。そこで彼は、対ソヴェト・ロシア技術援助協会へ多くの労働者が登録しつつあり、またアメリカから帰国したロシア人が仕事を待っていることを聞き及び、アメリカで増えつつある失業労働者も含めて彼らに経済再建への参加を説く「経済再建」案を執筆し、それはボロディンを通じてレーニンに届き、レーニンから「よい考えだ」との反応を得たという。その案にIWW指導者で、逮捕を逃れるようにコミンテルン第3回大会およびプロフィンテルン創立大会出席を理由に1921年4月末にモスクワへやって来たヘイウッドが共鳴した。すぐに三者は共同して6月前半、案のまとめに取りかかった⁽¹⁰⁵⁾。

彼らは（アメリカから戻って来たばかりで、アメリカの現地情報に通じ、技師としての経験を持つ）マルテンスに参加を求めたけれども、マルテンスは特にキャルヴァートのIWWの立場および（ヘイウッドは帰国困難である故に）合衆国での陣頭指揮への不安故に、気が進まなかった⁽¹⁰⁶⁾。けれども、最終的

にはマルテンスもリュトヘルス、キャルヴァートらの署名に加わり、1921年6月12日付レーニン宛書簡の中に掲げられる提案が作成された⁽¹⁰⁷⁾。それがレーニンの強い後押しにより上記6月22日決議に盛り込まれることになった⁽¹⁰⁸⁾。

その調査旅行を1921年9月4日に終えたリュトヘルスは、9月12日に報告書を作成した。その中で、ロシア到着からクズバスまでの4,000人のアメリカやその他の外国人の輸送の保障、クズバス用の機械購入のため20万ドルの貸付金の支出、労働者募集のため合州国へ派遣するキャルヴァートへ全権を与え、その費用として総額5,000ドルを予め決めておくことなどのCTOへの要求が掲げられた⁽¹⁰⁹⁾。そのリュトヘルス提案は9月13日に人民委員会議で討議されはじめ、CTOは9月23日にリュトヘルス・グループと契約するのが望ましいと認め、10月17日にはリュトヘルス—キャルヴァート—ハイウッド計画に対して（後二者への上記の不安をやわらげるために）創始者グループ構成員を拡大し、ソヴェト政府の財政支援を30万ドルまでとするレーニン提案に正式な承認を与えた⁽¹¹⁰⁾。10月21日にはCTOと創始者グループとの間で最終合意書が取り交わされ⁽¹¹¹⁾、それは10月25日の人民委員会議で最終的に承認された⁽¹¹²⁾。そして12月半ばには、CTOから同コロニーへの全権代表としてシャトフも加わることになる⁽¹¹³⁾。

マルテンスとリュトヘルス、ともに技師であり、社会主義者であり、そしてほぼ同時期に在米経験を積んだ両者が、1921年春モククワに戻って来て同種の提案をし、アメリカからを主とした産業移民による社会主義建設への道を推進することになった。

ただし留意すべきは、前章で既述のように、その1年前に両者には微妙な意見の対立があったことが公になったのであり、その対立はその後も尾を引いていた。すなわち、マルテンスはリュトヘルス、ヒルキット、キャルヴァートによる提案に一時は署名参加したものの、とくに後二者への不信をぬぐえなかった。レーニンのトロツキー宛1921年9月30日付書簡によると、マルテンスは三者を次のようにみていた。キャルヴァートは堂々としておらず、ハイウッドは煽動家にすぎず、半分アナキストであり、そしてリュトヘルスはすばらし

い同志で、宣伝者であるが、おそらく管理者ではあるまい、と⁽¹¹⁴⁾。

そこには、リュトヘルスへの「管理者」としての不安も挙げられているのだが、そのことはリュトヘルスの回想の中で記された対立点と関わっていたであろう。すなわち、レーニンは技師マルテンスに我々〔リュトヘルスら〕とこのプランをさらに練ることを一任した。マルテンスは、プランはウラルに限定されるべきで、企業は協同組合的性格を帯びるべきであると提案した。これに対して我々は、それが利益享受を伴うゆえに断乎拒否し、内部組織がある程度の自由を持ったソヴェト国営企業であることを主張した。我々は創設時およびその後の経過の中で官僚主義的干渉を懸念するので、新しい組織がBCHX（同議長ボグダーノフ〔П.А. Богданов〕は断乎この計画に反対した）を経ず、直接CTOへ従属することを要求した、と⁽¹¹⁵⁾。

リュトヘルスによって批判されたBCHXはいまや工業管理機関へと降格され、創設当初BCHXに課された経済的全般的調整および計画化の任務が1920年12月にCTOへ引き継がれるようになったことも要求の背景にあったであろう⁽¹¹⁶⁾。がしかし、彼が1921年9月16日付レーニン宛書簡で説明した要求の理由は、同年6月29日のBCHX幹部会によって形成されたマルテンスを長とする移民問題部は未だ萌芽状態であり、活動できなかったからである、と限定的であった。さらに続けて、いささか唐突に1年前のマルテンスとの対立が持ち出された。「アメリカにおけるマルテンス使節団の勤務員は、そこで革命家の中に、そんなに容易に克服できない対立を招いた。それゆえこの問題の特別な審議が望ましいであろうに」と⁽¹¹⁷⁾。

実は、上記リュトヘルスらによるレーニン宛1921年6月12日付書簡の原案はリュトヘルスによってキャルヴァートとマルテンスの協力を得て作成されたのだが、その中で次のような表現があった。「クズネックが資本家の利権として割り当てられかねないとの理由でありうる反対は、深刻だとはみなされない。というのは、直ちに大量の資本を提供することにもとづいてクズネック炭田において真正の利権を得る好機は、目下非常に少ないからである」⁽¹¹⁸⁾。そこでは、外国資本を受け入れないで済むプロジェクトであることが意識されている

のだが、その受入を否定していない限りにおいてマルテンスの署名参加が可能であったのではないだろうか。というのは、マルテンスばかりではなく、レーニン自身がリュトヘルスらの計画を支持するものの厳しい財政および困窮状態をより強く認識し、外国資本主義企業家との提携も辞さずとの考えを抱いていたのであり、その相談をマルテンスに持ちかけていたからである。そのマルテンスの役割は、既述の在米中の彼の商業活動に通ずるものであった。

モレイの表現を借りれば、レーニンは先進国の資本主義会社に対する利権許可へのリュトヘルスによる非難を過度な「左翼主義」(leftism; левизна)の兆候とみなした⁽¹¹⁹⁾。レーニンにとっては、外国資本家がソヴェト共和国と話し合って利権を得はじめていることを世界に知らせることは政治的に非常に重要であった。1921年10月28日、(すでにソヴェト・ビューローに無給メンバーとして協力し、帰国後のマルテンスによって呼びかけられたその事業を請け負うことになる⁽¹²⁰⁾) ジュリアス・ハマーおよびその息子アーマンド (Julius & Armand J. Hammer) とソヴェト政府との間で、ウラル地方アラパーエフスクの asbestos 採掘権および同地方労働者への小麦粉100万プードの提供 (買入) に関する契約が成り、そしてレーニンが強く望んだ「この利権と契約のことをなるべく広く公表すること」は11月3日になされた⁽¹²¹⁾。

この自治産業コロニー・クズバスの行く手にも影を落としかねない問題の追究は、本稿の範囲を超える。

1921年半ばまでに国外労働者のソヴェト・ロシアへの入国移民の歴史の第一段階が終わった。大量の組織されていない労働者の入国の可能性は、きっぱりと拒否された。それ以後、ロシア人移民のアメリカ合州国からの再入国が本格化することになる⁽¹²²⁾。かくして入国移民が制限される中、在米ロシア人移民だけではなく「とりわけアメリカ人労働者および産業的に訓練された農民」とあるように、アメリカ人の入国はより容易にされ、外務人民委員部は合州国で組織された工業および農業グループに「疑問のいかなる審議もなしに」入国ヴィザを与えることとなった⁽¹²³⁾。

このアメリカからの労働者の流入は、まもなく産業労働者コロニー建設へと導かれていく。その新たな米ソ労働者連帯の歴史を追究することは、機会があれば改めて行うこととして、米ソ労働者連帯の前史と位置づけられる本章後半をもって、ひとまず本研究ノートを閉じることにする。

〔付記〕 本研究は日本学術振興会（JSPS）科学研究費補助金（研究課題番号 21520749）の助成を受けたものである。

注

- (1) 本研究は、2009～2011年度科学研究費補助金によるものであり、2012年5月に同研究成果報告書を提出する際、この補章2までを再編集し、新たに加筆し、そして改題してまとめられた。その「在米ロシア人移民労働運動史研究——在米ロシア人コロニー統一の試みを中心に——」は、本研究ノート（3）が公開されるまでには九州大学学術情報リポジトリ（Kyushu University International Repository）に登録・公開される予定である。
- (2) *Совещание Российских Консулов и представителей русской колонии 29-30 сентября и 1 октября 1917 г. в Нью-Йорке*. Краткий отчет, составленный редакционной комиссией, в которую входили участники совещания О. Дымов, Е. Омельченко и П. Бланк (New York, 1917).
- (3) *Ibid.*, 1-5.
- (4) *Ibid.*, 6.
- (5) *Ibid.*, 7-9.
- (6) *Ibid.*, 10-11.
- (7) *Ibid.*, 11.
- (8) *Ibid.*, 12-13.
- (9) *Ibid.*, 13.
- (10) *Ibid.*, 14. ただし、1917年10月25日の『ノーヴィ・ミール』（以下『HM』と略記）および『ルースコエ・スローヴォ』両号の中で記された同委員8名と照合すると、以下のような移動がすぐにあった。最初の7名のうち、ブラギンスキーとチェルノフが抜け、代わりにゲールヴィチ、ストクリツキー、スハレフスキーが入り、『HM』グループが優勢となった。*Новый Мир* (New York), No.1130, 25.X.1917, 4; *Русское Слово* (New York), Vol.7, No.1735, 25.X.1917, 5.
- (11) *Совещание*, 14-15.
- (12) “200,000 Slavs Here Ready to Fight Kaiser,” *The New York Times* (New York), Vol.78, No.26121, 23.V.1918, 14.

- (13) И.К. Окунцов, *Русская Эмиграция в Северной и Южной Америке* (Buenos Aires, 1967), 406.
- (14) Federation of Russian Organizations in America 1918-1924, Box 1 [hereafter cited as FROA], Folder 1, Manuscripts and Archives Division, New York Public Library, New York.
- (15) FROA, Folder 1, N=6Д.
- (16) FROA, Folder 3; cf. Folder 1, N=1. のちに議長以外は以下に交代する。副議長はマルティノヴィチ、出納係はコンスタンティノフ（Б. Константинов）、そして書記はチェルノフ（А. Чернов）に。 FROA, Folder 3.
- (17) FROA, Folder 2.
- (18) Diary, October 9, 1919, Boris Alexandrovich Bakhmeteff Papers, Box 36, Bakhmeteff Archive, Rare Book & Manuscript Library, Columbia University, New York.
- (19) Diary, November 24, 1919, Bakhmeteff Papers, Box 36.
- (20) Материалы по деятельности Российской Чрезвычайной Миссии в Северо-Американских Соединенных Штатах, Bakhmeteff Papers, Box 37.
- (21) FROA, Folder 2; cf. Ко всем русским организациям Соед. Штатов и Канады, *ibid.*, Folder 6.
- (22) FROA, Folder 2.
- (23) FROA, Folder 2.
- (24) FROA, Folder 1, No.7A; N6; N4.
- (25) FROA, Folder 1, No.8A; cf. No.2A; No.3A.
- (26) FROA, Folder 1, No.2Б.
- (27) FROA, Folder 1, No.8A; No.5.
- (28) FROA, Folder 1, No.8A.
- (29) FROA, Folder 1, No.8A.
- (30) FROA, Folder 1, No.6.
- (31) “Сегодня открывается 2-ой обще-гражданский съезд,” *Русское Слово*, Vol.8, No.2149, 13.XII.1918, 1.
- (32) *Русское Слово*, Vol.8, No.2150, 14.XII.1918, 1.
- (33) *Русское Слово*, Vol.8, No.2153, 17.XII.1918, 1.
- (34) *Русское Слово*, Vol.8, No.2154, 18.XII.1918, 1.
- (35) FROA, Folder 3 (1918年11月25日付招請状).
- (36) New York (State); Legislature; Joint Legislative Committee to Investigate Seditious Activities [hereafter cited as Lusk Committee records], L0032, Folder 14, New York State Archives and Records Administration, Albany, New York.
- (37) *Papers Relating to the Foreign Relations of the United States. 1919. Russia* (Washington, 1937), 133-141.
- (38) Lusk Committee records, L0032, Folder 29.
- (39) Cf. *The Truth About the Lusk Committee. A Report. Prepared by The Legislative Committee of*

- the People's Freedom Union* (New York, 1920), 4-14; *The New York Call* (New York), Vol.12, No.166, 15.VI.1919, 8.
- (40) Cf. *Soviet Russia* (New York), Vol.1, No.3, 21.VI.1919, 3.
- (41) The Russian Soviet Bureau in the United States (Special Report No.5), G.T. 7698, Cabinet Papers CAB 24-83, The National Archives, London. 早々と報じられたのは、1919年6月12日の上記強制捜査によって押収された文書類の保管部屋に駐米イギリス憲兵司令官の部下が非公式に入り、記録を取ることができたことによる。Cf. A.C. Sutton, *Wall Street and the Bolshevik Revolution* (New Rochelle, New York, 1974), 115; *The New York Call*, Vol.12, No.174, 23.VI.1919, 1, 3; No.176, 25.VI.1919, 1-2.
- (42) *Советско-Американские отношения. Годы непризнания. 1918-1926* (Москва, 2002), 105-107.
- (43) *Ibid.*, 114.
- (44) *Ibid.*, 100. ラスク委員会でのマルテンスの証言によれば、得られた資金の約4分の3はアメリカの通貨で、残り約4分の1はスウェーデン、デンマーク、ノルウェー、そしてオランダの通貨であったとのことである。同じく証言でマルテンスの通信相手として名が挙げられた、当時ストックホルムのソヴェト・ロシア政府外務人民委員部代表であったスウェーデン社会民主左党書記ストレム (F. Ström) もまた、送金に関与したことは疑いないし、そのことをアメリカ陸軍省軍情報部も把握していた。*Testimony of Ludwig C.A.K. Martens taken before the Joint Legislative Committee of the State New York Investigating Seditious Activities* (n.p.[New York], n.d.[1919 or 1920]), 68, 91, 126-127; Correspondence of the Military Intelligence Division of the War Department General Staff, 1917-1941, RG 165, 10110-1194-258 & 259, National Archives and Records Administration [NARA], Washington, D.C.; cf. 山内昭人『初期コミンテルンと在外日本人社会主義者——越境するネットワーク——』(ミネルヴァ書房, 2009), 25.
- (45) *Советско-Американские отношения*, 108-109.
- (46) *Ibid.*, 109-110; Records of the Federal Bureau of Investigation [1908-1922], RG 65 [hereafter cited as Records of FBI], [BS]202600-779, NARA.
- (47) *Советско-Американские отношения*, 110-111.
- (48) Report of S-500 (New York City) on Bolsheviki Activities, Records of FBI, OG376304.
- (49) Cf. Н.Г., “К предстоящему съезду Русской Социалистической Федерации в Америке. Статья первая,” *Новый Мир*, No.2188, 28.VII.1919, 3.
- (50) *Records of the Fifth Regular Convention of the Federation of Russian Branches of the Communist Party of America, Held in the City of Detroit, August 20th to 28th, 1919* (New York: Central Executive Committee, Federation of Russian Branches, CPA, 1919); Reprinted in: <http://www.marxisthistory.org> (edited by T. Davenport)
- (51) *Russian Propaganda* [Senate, 66th Congress, 2nd Session, Report No.526, April 14, 1920] (Washington, 1920), 5.

- (52) Lusk Committee records, L0032, Folder 14.
- (53) 山内昭人『リユトヘルスとインタナショナル史研究——片山潜・ボリシェヴィキ・アメリカレフトウィング——』（ミネルヴァ書房, 1996）, 182-184, 187-188.
- (54) *Советско-Американские отношения*, 113-114.
- (55) *Revolutionary Radicalism. Report of the Joint Legislative Committee Investigating Seditious Activities, Filed April 24, 1920, in the Senate of the State of New York, Part 1, Vol.1* (Albany, 1920), 653; 第2篇64頁参照.
- (56) Records of FBI, BS313846.
- (57) Records of FBI, [BS] 202600-779.
- (58) Report of the Federal Bureau Investigation's of Lewis Corey, 1949-1950, Lewis Corey Papers, Box 2, #5, typed pp.14-15, Rare Book & Manuscript Library, Columbia University.
- (59) 山内『リユトヘルス』第4章第6節参照.
- (60) Российский государственный архив социально-политической истории, ф. 515, оп.1, д.17, лл.18-20 [hereafter cited as РГАСПИ, 515/1/17/18-20], Москва; cf. РГАСПИ, 515/1/17/1-3（コミンテルン執行委員会議長ジノヴィエフのアメリカ共産主義両党中央委員会宛1920年1月12日付文書）.
- (61) 山内『初期コミンテルン』第1章第4節（2）.
- (62) РГАСПИ, 515/1/31/1-5.
- (63) *Советско-Американские отношения*, 125-126.
- (64) “A Significant Letter (The Letter of S.J. Rutgers to L. Martens),” *The Communist. Official Organ of the Communist Party of America* (Chicago), Vol.2, No.6, 1.VI.1920, 3, 8. 同書簡について、マルテンスは（ロシアに戻り外務人民委員部協商国・スカンジナビア部サブセクション長となっていた）ヌオルテヴァ宛1920年11月4日付書簡で、原物は私の手元にあるので、それはアメリカ司法省によって盗撮された、と言及している。*Советско-Американские отношения*, 161-165. コミンテルン文庫「アムステルダム臨時ビューロー」ファイルの中には送付元のリユトヘルスの写し控帳があり、それによって日付および公表されたのが計5枚のうち後半3枚分であることがわかる。РГАСПИ, 497/2/4/9-13. 2枚目途中から、マルテンスがアメリカ共産党を公然と支持するのは不可能であろうが、にもかかわらず何らかの危険を冒してまでもそれを支持することは当然のように思える、などすでにその話題に入っているので、前半は盗撮されなかったのではないか。
- (65) N.I. Hourwich, “Problems of the Representative of Soviet Russia in America,” *The New York Communist* (New York), Vol.1, No.1, 19.IV.1919, 7; (the revised and abridged version:) id., “Problems of the Soviet Representative,” *The Revolutionary Age* (Boston), Vol.1, No.27, 19.IV.1919, 6.
- (66) РГАСПИ, 515/1/61/32.
- (67) 山内『初期コミンテルン』, 76-77.

- (68) Cf. *Soviet Russia*, Vol.3, No.26, 25.XII.1920, 645; Supplement to No.26, i-iv; Vol.4, No.10, 5.III.1921, 241.
- (69) K.A.S. Siegel, *Loans and Legitimacy. The Evolution of Soviet-American Relations 1919-1933* (Kentucky, 1996), 37.
- (70) Омельченко, Е.И./О.А. Корф (Omeltchenko, E.I./O.A. Korff) (chief editors), *Русско-американский справочник/Russian-American Register* (New York, 1920), 19.
- (71) *Foreign Commerce and Navigation of the United States for the Calendar Year 1920* (Washington, 1921), x-xi.
- (72) *Документы внешней политики СССР*, Т.2 (Москва, 1958), 234.
- (73) *Soviet Russia*, Vol.3, No.14, 2.X.1920, 334.
- (74) *Soviet Russia*, Vol.4, No.5, 29.I.1921, 113.
- (75) [Message as Intercepted of L. Martens on the work of the Soviet Mission in America, Moscow, 24.II.1921] Records of FBI, BS202600-[between 785 and 827]; Reprinted in: <http://www.marxisthistory.org> (edited by Davenport)
- (76) Manuscript for answering the question from *New York Tribune* [?], dated 21.IV.1919, Lusk Committee records, L0032, Folder 14.
- (77) *Soviet Russia*, Vol.1, No.25, 22.XI.1919, 14-15.
- (78) *Soviet Russia*, Vol.2, No.1, 3.I.1920, 13.
- (79) *Soviet Russia*, Vol.4, No.12, 19.III.1921, 285-286.
- (80) *Russian Propaganda*, 12.
- (81) Records of FBI, [BS]202600-779.
- (82) Cf. Л.К. Мартенс, “Иммиграция русских рабочих из зарубежных стран и наша промышленность,” *Экономическая жизнь* (Москва), No.157, 20.VII.1921, 1; Л.К. Мартенс, “Воспоминания о В.И. Ленине,” *Исторический архив*, 1958, No.5, 148; G.S. Kealey/R. Whitaker (eds.), *R.C.M.P. Security Bulletins. The Early Years, 1919-1929* (St. John's, Newfoundland, 1994), 48, 161-162.
- (83) Г.Я. Тарле, *Друзья страны Советов. Участие зарубежных трудящихся в восстановлении народного хозяйства СССР в 1920-1925 гг.* (Москва, 1968), 74, 76, 81, 84.
- (84) “The Arrival of Foreign Workers (An interview with the director of the Department of Emigration),” *Soviet Russia*, Vol.4, No.22, 28.V.1921, 528.
- (85) Тарле, 61.
- (86) Мартенс, “Иммиграция русских рабочих,” 1. 判読困難な箇所があり、以下の英訳を参照した（同英訳はタイトルを変更しているものの全訳である。ただし、転載に際して原掲載誌の日付が「1921年6月22日」と誤記された）。L.A. Martens, “Russian Workers from America,” *Soviet Russia*, Vol.5, No.4, X.1921, 156-158.
- (87) *Soviet Russia*, Vol.3, No.4, 24.VII.1920, 100.
- (88) Y. Felshinsky, “The Legal Foundations of the Immigration and Emigration Policy of the USSR,

- 1917-27," *Soviet Studies*, Vol.34, No.3, 1982, 329-330.
- (89) Маргенс, "Воспоминания о В.И. Ленине," 146.
- (90) Тарле, 119-120.
- (91) *Soviet Russia*, Vol.4, No.14, 2.IV.1921, 331.
- (92) *Soviet Russia*, Vol.4, No.17, 23.IV.1921, 399.
- (93) Тарле, 126.
- (94) *Soviet Russia*, Vol.5, No.2, VIII.1921, 79-80.
- (95) *Ленинский сборник*, Т.20 (Москва, 1932), 202. なお以下は、対ソヴェト・ロシア技術援助協会中央ビューローから入手したもので、「ロシアへ行く意志を持つ外国人労働者にとって重要である」との編注が付されて掲載されたその英訳であるが、第4～6条は省略されている。*Soviet Russia*, Vol.5, No.3, IX.1921, 102.
- (96) Тарле, 132-133; 『レーニン全集』第45巻（大月書店, 1969）, 833.
- (97) Тарле, 137-138.
- (98) Cf. *ibid.*, 131.
- (99) Cf. J.P. Morray, *Project Kuzbas. American Workers in Siberia (1921-1926)* (New York, 1983), 53.
- (100) Cf. *ibid.*, 44-48.
- (101) Verkort overzicht Biografie Ir. S.J. Rutgers en B.E. Rutgers-Mees, Archief S.J. Rutgers, Map I-1, Internationaal Insituuat voor Sociale Geschiedenis, Amsterdam; C. Рутгерс, "Встречи с Лениным," *Историк-марксист*, 1935, No.2-3 (42-43), 93.
- (102) Cf. 山内昭人「ラトヴィヤ・ソヴェト政権と「世界革命」（1918年秋～1919年春）——リユトヘルスとインタナショナル（続1）——」『史淵』142輯, 2005年3月, 98-101.
- (103) *Industrial Labor Colonies* by S.J. Rutgers. Published in the Moscow Organ of the III Congress of the Communist International, PГАСПИ, 626/1/12/12 [未見]; Morray, 46.
- (104) Morray, 37-39, 43.
- (105) *Ibid.*, 45-47.
- (106) *Ibid.*, 51, cf. 58-60.
- (107) "Организация автономной колонии американских рабочих 《Кузбасс》 (1921-1923 гг.)," *Исторический архив*, 1961, No.2, 71-74. ただし、復刻に際して日付を「6月21日」と誤っている。Cf. Тарле, 131.
- (108) Cf. 『レーニン全集』第45巻, 204-205.
- (109) "Организация автономной колонии," 78-83.
- (110) 『レーニン全集』第45巻, 481-482, 854; Morray, 67.
- (111) Morray, 68-69, 177-180.
- (112) "Организация автономной колонии," 86.
- (113) Тарле, 304; cf. "Организация автономной колонии," 92-93; Morray, 121-123.

- (114) В.И. Ленин, *Полное собрание сочинений*, Т.53 (Москва, 1982), 231-232; cf. Morray, 63.
- (115) Рутгерс, “Встречи с Лениным,” 94-95.
- (116) Cf. 庄野新『社会主義への挑戦——ソビエトの経験から』（マルジュ社, 1999), 55-82.
- (117) “Организация автономной колонии,” 85.
- (118) Second Kuzbas Paper-Prepared by S.J. Rutgers with the collaboration of H.S. Calvert and Ludwig A.C. Martens, Moscow, June, 1921, РГАСПИ, 514/1/4306/58-62.
- (119) Morray, 64; cf. 『レーニン全集』第42巻（大月書店, 1967), 474-476.
- (120) Cf. E.J. Epstein, *Dossier: The Secret History of Armand Hammer* (New York, 1996), 40-65; S. Weinberg, *Armand Hammer: The Untold Story* (Boston/Toronto/London, 1989), 35-46.
- (121) 『レーニン全集』第45巻, 411, 423-424, 446-447, 456, 865; Мартенс, “Воспоминания о В.И. Ленине,” 147-148; cf. Morray, 65-66.
- (122) Тарле, 126, 136.
- (123) Felshtinsky, 345.